

2022年10月23日 主日礼拝

説教題「主の口から出るすべての言葉で」出エジプト16章13～18節、申命記8章2～3節

主任牧師 加藤 誠

「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」(申命記8章3節)

主なる神が、昔も今も変わることなく望んでおられる第一のことは何でしょうか。なぜ主なる神は、イスラエルの人々をエジプトの地から導き出されたのでしょうか。「奴隷として苦しんでいた彼らの叫びを聴かれて救い出すため」。それも大きな理由ですが、最大の理由は「イスラエルの人々を礼拝に導き、主なる神ご自身との活ける交わりに生きる幸いに招き入れるため」でした。

イスラエルの人々がエジプトで奴隷であった時、彼らは聖書の主なる神をほとんど忘れてました。私たちからすると、イスラエルの人たちは創世記でアブラハム、イサク、ヤコブたちが信じた神への信仰を受け継いできたはずだと考えますが、その実態はイスラエルの人々の信仰も暮らしもすっかり「エジプト化」されていました。創世記と出エジプト記との間には、約四百年もの隔たりがあったからです。

創世記のアブラハム、イサク、ヤコブの信仰の話は、この時のイスラエルの人々にとっては「聞いたことのある昔話」であり、今エジプトに暮らす自分たちの生き方や日常生活には直結しない、関わりないものになってしまっていたのです。

そのイスラエルの人々に、主なる神は、モーセを通してご自分の存在を知らしめます。モーセが「イスラエルの人たちから、神の名は何というのかと聞かれたら、どう答えたらよいでしょうか」と尋ねますと、主なる神は「わたしはある、わたしはあるという者だ」(出エジプト3:14)と応えています。英語では“**I am who I am.**”と翻訳されていて、その意味は「神は人の手によって造られたのではなく、ご自身で存在する神だ」と一般に解釈されていますが、ある旧約学者は、神が「わたしは必ずあなたと共にいる！」と深い愛と決意を込めて語りかけている宣言として聴くべきだと解説していました。つまり「どんなに厳しい時でも、どんなに苦しい状況でも、わたしは必ずあなたと共にいる神」として、主なる神はご自分のことをイスラエルの人々に自己紹介されたのです。

けれども、その神の名前を聞いただけでは、イスラエルの人々はピンとこなかったことでしょう。神はモーセを通してさらに語り掛けます。「わたしはあなたたちをエジプトのファラオの支配から救い出し、約束の地にあなたがたを導き入れる。あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる」と(6:6-8)。つまり、エジプト脱出を通して、「エジプトのファラオを中心にした生き方」から「神の愛と正しさを真ん中にした生き方を学ぶ旅」、「神を礼拝しながら生きる旅」

へと、主なる神はイスラエルの人々を導き出されたのでした。

けれども、エジプトの暮らしにすっかり染まっていたイスラエルの人々にとって、「礼拝を真ん中にして、神の愛と正しさにつながり生きること」は簡単ではありませんでした。エジプトの生活は「自分の欲望をまず求める社会」です。誰もが力と富を求めて競い合う社会です。それに対して「神を真ん中にした社会」は、自分の判断の前に「神が何と言われているかを大切にする生き方」ですから、その方向転換は簡単ではありません。そんなことをしていたら、みんなに後れを取ってしまうからです。今日のこのマナという不思議な食べ物のお話でも、人々はモーセの言うことを聞かずに自分勝手な判断をして叱られています。また不思議なことに、多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれが必要な分を集めたと言います。それぞれが一日一オメル（2.30）分、神さまによって必要が満たされたのでした。このマナのお話は、私たちの理屈で理解しようとすると「こんなことがどうやって成り立つの？」と不思議に思います。けれども、どこかホッとする話です。いろんな家庭、家族の事情を抱えた一人ひとり、その必要を必ず満たしてくださる神を真ん中にしていく時、「自分の食べ物だけ、人に抜け駆けして貯めこむ必要はない」「大丈夫、神さまの愛の養いに信頼して、互いに優しさを届けあっていこう」と呼びかけられているような気がしてきます。

「エジプトのファラオが支配する世界を抜け出して、神の愛と正しさを真ん中にした新しい世界と一緒に旅をしよう！」と、神の招きを受けて始まった荒れ野の旅。その旅は、イスラエルの人々にとっては非常に厳しく辛いもので、つい不平や愚痴、弱音が出てしまい、自分の弱さと不信仰に向かい合わされる旅でしたが、同時にその旅は、主なる神の深い慈しみと不思議な養いを体験して、「わたしは必ずあなたと共に行く」という神への信仰を深められる信仰の旅路でもあったのです。

今朝の巻頭言では、農夫であったレニー先生のお父さんが牧師になる召命を与えられて神学校に入学したものの、子どもたちがお腹を空かせているのを見て、神学校を辞めようと言われた時のエピソードを紹介させていただきました。この文章を読んでいると、アメリカ南部の綿花の畑で、アフリカ系の農夫たちが歌を歌いながら綿花を摘む、その傍らで一緒に綿花を集めている子ども時代のレニー先生の姿、そしてお父さんが神学校に行かれた時に布団の中でお腹を空かせて泣いている小さなレニー先生の姿が見えてくるようです。それはお父さんお母さんにとっては、イスラエルの人々の荒れ野の旅に等しい、大変厳しい日々であったと思いますが、しかしその厳しい日々を通してこそ、神さまは「一日一オメル」のマナの養いをもってレニー先生ご一家を守り導いてくださったのでした。それはご一家が、神さまの御言葉を真ん中にした信仰に深く耕されるために必要な歩みだったのです。

「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」。この御言葉を私たちもまたしっかりと心の真ん中に受けていきたいのです。